ミシガン実践的英語演習

2期生 和田義史

8月3日(土)から10日(土)までの8日間、ミシガン実践的英語演習に参加しました。世界トップクラスと評されるミシガン大学のテクニカルコミュニケーション教育を受け、英語論文など研究発表のノウハウを得る非常に貴重な機会となりました。また、毎日の濃密な演習の合間をぬってウェルカムパーティやピクニックなど現地学生との交流もあり、アメリカ文化やミシガン大学の雰囲気を満喫するとともに、生きた英語・考え方を学ぶこともできました。

演習はR. DiGiovanni先生の講義とJ. Fishstrom先生、R. Sulewski先生によるマンツーマンの指導によって構成されています。講義で習った内容を踏まえて作成した論文の添削をマンツーマンで受けることにより、効果的に学ぶことができます。篠田義明早大名誉教授による日本での2回の事前講義と現地でのサポートもあり、日本人ならではの視点から実用英語の注意点などについても学ぶことができました。

講義では論理構成を中心に英語論文・ポスター発表・プレゼンテーションのノウハウを学びました。英語論文の執筆は研究成果を発表する上での強力な手段となっています。しかし日本語と英語とでは文法や語彙が大きく異なるためか、私は英語論文を執筆する構成の段階から大きな困難を感じていました。本講義では、ネイティブの論理構成法を実際の英語論文を参考にしながら学ぶことができました。さらに例えば、This work is significant becauseやFuture research should includeなど、主張を切り出す前の「ワンクッション」として便利な言い回し、具体的なコツについても教えていただき大変参考になりました。また、先生方のオープニング・クロージング挨拶や質疑の中からも、ポスター発表やプレゼンテーションに活用できるネイティブならではの言い回しを学ぶことができました。

▲必死に課題に取り組みつつ、順番にSulewski先生から個人指導を受ける学生たち。右から二人目が和田さん

マンツーマン指導では、初めは先生の言葉を聞き、理解するだけで精一杯でしたが、指導してくださる先生方が大変気さくな方で、どんな小さな質問にも丁寧に対応いただきました。次第に自分からも意見を出せるようになり、充実した指導を受けることができたと実感しています。また単純な文法面だけでなく、ネイティブの視点から不自然と感じる表現も添削していただけました。これらを通して、自分の弱点や曖昧にしていた部分を明らかにし、論理や言い回しに対する課題意識を持つことができました。

▲最終日、演習の集大成となるオーラルプレゼンテーションを終えて

▲演習と課題に追われる合間にもなんとか時間を捻出して大学周辺を散策

ミシガンで学んだ論理と生きた英語は、論文執筆に限らず研究活動や国際交流の様々な場面で通用するものだと確信しております。

和田義史　2013年早稲田大学先進理工学部 物理学科卒業。現在、先進理工学研究科 物理学及応用物理学専攻修士課程 1年。竹延大志研究室にて有機・ナノ材料による超低消費電力素子の実現に向けた物性研究を推進している。